



日時／平成30年2月6日(火) 14:00～15:30
会場／日本特殊陶業市民会館フォレストホール

名古屋市内9法人会合同講演会

私の仕事から

作家 林 真理子 氏



厳しい寒さの中、市民会館大ホールに1,200名を超す記録的な観客が訪れた。

人気作家林真理子氏の講演を中心待ちしていた数百名の女性ファンで開場30分前から口べに列ができていた。

列の中ほどに顔馴染みの法人会員の男性がいて、私を手招く。「ワifに誘われてね」と耳打ちするその人は「元気な名古屋の経営者」と呼ばれ、ゴルフのハンデが“5の下”というゴルファーでもある。日焼けした顔と気恥ずかしそうな仕草がミスマッチで面白い。

講師は昭和60年(1985)『最終便に間に合えば』『京都まで』で第94回直木賞を受賞。平成7年(1995)『白蓮れんれん』第

8回柴田鍊三郎賞。平成10年(1998)『みんなの秘密』第32回吉川英治文学賞等、名高い賞を総なめにしている。

そして今、話題の大河ドラマ『西郷どん』の原作者であり、当代一の作家として名高い。

「これまで直木賞作家と呼ばれていましたが、今の私は“大河作家”と言われるのが本当に嬉しい」と語った。

居眠りしていた?
「紅白の審査員」

冒頭、好物の名古屋飯と昨年大晦日の紅白歌合戦での審査委員の体験談で会場を和ます。

34年前、エッセイ集『ルンルンを買っておうちに帰ろう』がベストセラーになり一躍有名人になって、当時国民的俳優の三船敏郎氏と共に紅白のゲスト審査員となった。

昨年、再び紅白の審査員として、地元天才棋士の中学生、藤井聰太五段との対局の敗戦で、引退を決意した加藤一二三氏と並んで座られた。

今や茶の間の人気者“ひふみん”は、史上初の中学生棋士としてプロ入り、神武以来の天才として将棋ファンには知られた

存在である。異様に長いネクタイ、佳境に入ると持ち駒を将棋盤の側面をパチパチと鳴らし半腰になる対局姿勢が懐かしい。ユーモラスな語り口と止まらない熱弁で万人に慕われている。

34年振りの紅白では、舞台の端に審査委員席があり、ステージの様子が見にくく、下に置いてあるモニターを観ていたら、明けて正月、友人に「林さん、ずっと寝ていたでしょ!」と言われたそうだ。「そんな~いくら私でも寝ませんよ」と笑って語られた。

歴史学者
磯田道史氏の要望

『西郷どん』の視聴率15%にふれ、当日午後6時から始まるBSでの放映5%と足したら20%にもなる。BS放映を「早(はや)どん」、総合テレビを「後(あと)どん」と名付けて、視聴率は低くはない、素早くフォローした。

原作『西郷どん!』と大河ドラマ『SEGODON 西郷どん』と異なるのでは?の声に、それで構わないと言う。脚本家 中園ミホ氏の「オーソドックスで骨太の原作だから、いくらでも





「ジャンプできる」の声に、「史実通りでは面白くないから、自由にやって欲しい」と期待を寄せ、企画段階で『西郷どん！』の字画が良くないと指摘され『！』の削除に応じた。

林真理子氏は、日本経済新聞連載の『愉悦にて』を連載中でもあり、恋愛小説家というイメージが強いが、『下田歌子、柳原白蓮、徳川慶喜』などの歴史小説も多く手掛けている。

『西郷どん！』執筆の経緯は、平成26年(2014)にさかのぼる。

歴史学者として著名な国際日本文化研究所センター准教授の磯田道史氏から「2018年は明治維新150年。以前、大河ドラマで長州を取り上げたから次は薩摩となる。単独で取り上げていないのは西郷隆盛一人。ぜひ書いて欲しい」と申し入れがあった。

当初、偉人で英雄の西郷隆盛は難しいと躊躇していたが、「背伸びしない限りは、成長なし」を自認する林真理子氏は、親友の磯田氏の言葉を受けて立つ。

作品名『西郷どん！』は、取材に訪れた奄美大島の空港の書店で購入した西郷隆盛に関する数冊の中の、薄っぺらな『西郷どんの教え』という本に、振り仮名の「せごどん」を見つけて「これだ！」と決めたそうだ。

歴史小説の執筆は、編集者と数人のチームを組んで様々な角度から徹底的に下調べをして勉強をする。「何度も何度も薩摩に行き、空を見て、桜島を見て、西郷隆盛について考えた3年間でした」と振り返る林真理子氏の姿に感銘を受けた。

西郷隆盛の人物像

大河ドラマは、西郷隆盛の顔を誰も知らないことを示唆するシーンで始まる。写真嫌いな西郷は一枚の写真も残していない。明治維新の英雄として伝えられる写真は、残された子息たちの写真の合成なのだ。

林真理子氏が描く西郷は、奄美大島で「愛加那」に出逢い、家族の愛を知り、二人の子どもを授かった体験が大きく影響している。

「人のためには、自分はどうなってもいい」の考えに至ったのは、流刑され獄中の失意のなか、「愛加那」と島の人々に救われた日々の暮らしにあるとう。





林真理子氏は、歴史小説は、「資料を読み、専門家のレクチャーを受け、頭に入れたことを一旦すべて忘れて、覚えている2割で小説に書く」と言う。大切なのは冒頭シーン。読者の心を掴まえるために華やかで、美人をいっぱい登場させるのだと言う。

勝海舟と西郷隆盛との江戸無血開城の時も、様々な政治劇が繰り広げられるが、幕末の資料からどれを探り上げるのかは作家の腕の見せ所となる。

小説の最後のシーン。西南戦争の終わり頃、美少年2人が「自分たちがここに来たのは父親への愛のためだった」と語りながら死んでいく。自分でもあまり

にも巧く書いて、苦しかった『西郷どん!』と戦った3年間をも思い出して泣いたそうだ。

優れた作家は 聞き上手

師と仰ぐ渡辺淳一氏の『失乐园』が連載されたとき株価は3万円を超した。不思議なことに、『愉悦にて』の連載が始まると株価が急に上がった。某週刊誌は「日本経済に貢献した」「おじさんたちが毎朝読んで元気になったから」と評価している。

優れた作家は、聞き上手の特殊な才能を持ち合わせている。

連載中の『愉悦にて』で男性ファンが増え、外交官からも「読んでいますよ。いいですね」と褒められると、素早く現役外交官の年収を聞き出す。

講師は、「人は恋愛とか色事を話したい欲望があり、長年に渡って男性の女性自慢を聴いているから、オバさんである私でも書ける。執筆にあたっては、おだてながら話を聞くためにはセッティングにも経費がかかる。本の印税は皆様からの取材費としての贈り物だと思って

使っている」と打ち明けた。

京都でのお茶会のシーン。「斎王代を務めた美しいお嬢様が振り袖を着て」と書くと、京都でお金持ちの美しいお嬢様の姿を思い浮かべさせ、その場の高貴な空気が漂ってくる。上流階級の人々の華やかさを描く秘訣は、きめ細かなディテールにこだわっているからである。

歌舞伎座へ行けば、歌舞伎を観るだけでなく、歌舞伎役者の妻たちとご贊賞の奥様たちとのやりとりをつぶさに聴き耳を立てて。

「作家は天職です。書きたいものは尽きることがありません。勉強やリサーチのため私の本も図書館で予約待ちしないで、本屋さんで買ってください」。

還暦を過ぎておられるそうだが若々しく、本音トークでファンを魅了する講師。好奇心旺盛で逞しい想像力。楽しみながら人間を観察する力に驚かされる。

※この記事は、講師林真理子氏の要望により、レポート形式の掲載です。

文責／公益社団法人 名古屋西法人会

